

## 【助成 39-54】

### ビジョン介入を用いた英語学習に対する動機づけ向上に関する量的・質的検証

代表研究者 信州大学教育学部 助教 青山 拓実

#### 〔研究の概要〕

本研究は、外国語学習の成功に影響を与える要因の一つである、第二言語学習者の動機づけについて、学習者自身の将来の自己イメージに着目した理論である L2 動機づけ自己システム理論に基づいて、日本人大学生の英語学習者に対して実際の指導を通じた効果の検証を行った。指導プログラムは理論的背景、活動事例、海外での先行研究に基づいて構築し、事前・事後アンケートによるスコア比較ならびに質的調査の分析結果に基づいて効果を検証した。その結果、ビジョン介入は理想の自己像やその実現可能性について考えることを通して、将来の自己イメージの明確化ならびに英語学習に対する努力に効果を与えることが明らかとなった。

#### 〔研究経過および成果〕

##### 1. 研究背景

第二言語習得において、学習者の動機づけは学習成果に大きな影響を与える要因の一つであり、日本における学習環境でも、これまでに多くの理論的・実証的研究が行われてきた。本研究は、日本人英語学習者を対象とした介入を伴う実証的研究を通じた検証事例が蓄積されていない Dörnyei (2009) による L2 動機づけ自己システム理論 (L2 Motivational Self System) に基づき、学習者が持つ英語学習に関する将来の自己像を明確化することを通して動機づけを高めるための要素を含んだコミュニケーション活動を中心とする英語指導(ビジョン介入)を行うことにより、日本人英語学習者が将来理想とする英語使用に関する自己像 (L2 理想自己) を明確にし、英語学習に対する動機づけを向上させることができるかについて、①受講前後での自己認識の変化及び②その変容のプロセスの両側面から検証することを目的とする。

##### 2. 研究方法

本研究の参加者は、研究代表者の所属機関において募集した日本人の大学生英語学習者 13 名であった。ビジョン介入の内容は Dörnyei and Kubanyiova

(2014) による理論的説明, Dörnyei and Hadfield (2013) による活動事例ならびに海外での研究事例 (e.g., Sato & Lara, 2019) を参考として構成し、オリエンテーション 1 回と 60 分の授業 6 回からなる計 7 回のプログラムとして実施した。授業ではビジョンの構築、ビジョンの強化、ビジョンの検証、ビジョンの現実化を主要要素として含む、参加者の実態に合わせたレベルの英語コミュニケーション中心型活動を行った。

指導効果の検証は、英語学習に対する動機づけに関するアンケート調査によるデータ、毎回の振り返りシートの内容、プログラム終了後のインタビュー調査のデータ分析によって行った。アンケート調査は、学習者の将来の第二言語使用者像 (L2 理想自己, L2 義務自己)、外国語学習に対する努力に関する質問項目によって構成され、プログラム開始前・終了後に実施した。毎時間の振り返りでは、その時間の活動を通して考えたことや、学んだことに関する記述を求めた。インタビュー調査はすべてのプログラムの終了後に実施し、回顧的に学習中の経験について尋ねた。

##### 3. 分析結果

事前・事後アンケートのスコアは、繰り返しありの  $t$  検定を用いて統計的に比較した。効果量 Cohen's  $d$  は

Plonsky and Oswald (2014) による外国語教育研究における基準 (効果量小:  $d = 0.40$ , 効果量中:  $d = 0.70$ , 効果量大:  $d = 1.00$ ) を用いてその効果を検討した。

第二言語学習者がもつ将来の自己像のうち, L2 理想自己のスコアは事前テストと事後テストの間に有意な差と大きな効果量がみられ ( $p < .001$ ,  $d = 1.43$ ), 参加者がもつ将来「なりたい」英語使用者像が明確になったことがわかった。将来予期される失敗の回避などに関連づけられた概念であるL2義務自己については, 有意な変化がみられたが効果量は小さく ( $p = .050$ ,  $d = 0.60$ ), 周囲からの要請や義務感による, 将来「あるべき」英語使用者像については強化されていないと考えられる。また, 実際の英語学習に向かう努力について測定する学習努力の項目についても, 有意差とともに大きな効果量がみられたことから ( $p < .001$ ,  $d = 2.43$ ), 本研究における指導プログラムは参加した英語学習者の将来なりたい英語使用者としての理想像について明確にただけではなく, 実際の学習行動についても, その努力量を向上させたと考えられる。

質的データ分析は, 授業ごとの振り返りシートの記述ならびにインタビュー調査のデータを対象として行った。紙面の関係上, 一部のデータについて取り上げる。分析では学習プロセスの側面に焦点を当て, プログラム参加期間中にどのようなことを考えたかが明らかとなる記述に注目して分析した。その結果, ①理想の自己像について考え, ②自己像の実現可能性について検討し, ③自己像に近づくための目標を設定するプロセスがみられた。L2 動機づけ自己システム理論では, 強い将来の理想的な自己像を持っていることだけが学習の原動力となるのではなく, その自己像が明確かつ実現可能であると考えられることが重要であるという点が議論されている。本研究でみ

られたプロセスによって, 参加者は「ただ理想を語っても現実味がないので, 留学でどの域まで達することが出来るのか現実的に考えて... (略)...は大事だと思った」というように, 理想の自己像の実現可能性を現状での英語運用能力と照らし合わせて考えることができた。また, 「考えている以上に海外に出ることのハードルが低いのかもしれない」というように, それまでは現実味のない目標であると考えていたものについても, 逆にそれが実現可能であると見直すことができたという点もみられた。さらに, 本研究の授業は英語を用いて行い, 参加者間のコミュニケーションも英語であった。これにより, 「初めはできなかったが, その後教えて貰いながら様々な活動に取り組むことができたのでよかった」という内容が示すように, 英語運用能力の向上についても影響があったと考える。

#### 4. 結論

本研究の結果から, これまで海外の研究によって効果が示されてきたビジョン介入は日本人英語学習者に対しても有効であることが示唆され, そのプロセスを明らかにすることができた。本研究の限界点としては, 実施形態が正規の授業外で実施したプログラムであったことから, すでに英語学習に対する意欲が強い学習者が参加を希望していたことが考えられるため, 今後の研究においては, 異なる英語運用能力のレベルをもつ学習者に対象を広げた検証を行う必要があると考えられる。例えば, 本研究の対象者は大学生の英語学習者であったが, 異なる学校段階や, 大学卒業後の社会人レベルの英語学習者を対象とすることにより, より多くの日本人英語学習者に対して効果のある指導方法を検討することができるだろう。

[発表論文]

国際学会 1 件, 国際学術雑誌への投稿準備中。